

## 遠藤 実さんの珠玉の言葉

一九九六年、タニサケ発行の小冊子、三輪真純先生の

「いのちの呼応こきうによる喜びの発見」(絶版)より

テレビで作曲家、遠藤実さんの一代記の放映がありました。彼は昭和七年生まれで、戦争中、父親の故郷の新潟郊外に母と疎開そかいし、食べ物のない貧しい生活に入ったため、いろいろなもので空腹を満たしていました。ある日、タニシを拾いに行つて大きなタニシを見つけました。拾おうとするとタニシはこなごなになつて、その下にタニシの赤ちゃんが詰つままっていたのです。わが子を育てるために母タニシは自分の肉を与え、命がつきても外敵から子を守っていたのです。遠藤少年はこのタニシに、自分の母親の姿を見たのでした。

それまでは、やせてボロをさげた母を汚きたならしいと思つていました。友達と同じように、若くてきれいな母親が欲しいと思つていたのですが、母は誰のためにボロをさげているのか……それをタニシから教わつたのです。

それから、遠藤少年は中学への進学を断念し、いつも慰なぐさめてくれていた歌の世界に進む決心をします。旅まわりの楽団に歌手として採用され、旅の生活に入つたのですが、間もなくその楽団は解散し、彼は仲間と農村の家々を「門付かどづけ」をして歩きます。

その後、彼は貧苦ひんくのなかで十六回も転々と職を交えることになりました。ある時、決心して、農家の手伝いをやめ、昭和二十四年に両親にも言わず友人から貰つた靴を売つて旅費をつくり、よれよれのズボンに底のない靴をはいて、上京して「ギター流し」をやり、遂ついに「夢追い人」として初志をつらぬいたということです。やがて彼は作曲家として名をなし、中学を出ていない彼が作曲した「高校三年生」を当時の高校生が歌っていたのです。